

「堀江物語」と和歌

—— 古浄瑠璃本文と「伊勢物語」の關係を中心に ——

深 谷 大

はじめに

「堀江物語」は、武家物ないしはお家騒動物として、「村松」「明石」「師門」「はもち中将」などとともに、人口に膾炙している物語である。「看聞御記」応永二十七年（一四二〇）十一月十三日の「諸物語目録」に「堀江物語一帖上下」と記載されていることから、成立は十五世紀初頭まで遡る。「堀江物語」は、「村松」と同様に、室町物語と古浄瑠璃の二系統の本文が残ることから、草創期の浄瑠璃を考える上で重要な作品である。

本稿では、「堀江物語」について、室町物語本文ではなく、古浄瑠璃本文にのみ見られる和歌の典拠を探るとともに、古浄瑠璃本文における和歌の役割について考えてみたい。

一、「堀江物語」の諸本と古浄瑠璃

「堀江物語」には室町物語と古浄瑠璃に諸本が残る。室町物語には、

写本二点（年記「元和四年（一六一八）むつちのへん正月吉日」。慶応義塾図書館所蔵本。実践女子大学図書館所蔵本）と、版本二点（刊記「寛文七年（一六六七）丁未十一月吉日 野田弥兵衛板行」。国立公文書館内閣文庫所蔵本。国会国会図書館所蔵本）が残る。写本には「右元和四戊午年古写本以三河国宝飯郡新城町三原屋紋右衛門家本写之」等の識語がある。

一方、古浄瑠璃は、未だ浄瑠璃正本の伝存を聞かない。「堀江物語絵巻」（残欠本。七巻。香雪美術館（三巻）、京都国立博物館（一卷）、長国寺（一卷）などに分蔵。以下、堀江と略記）と、「堀江巻雙紙」（完本。絵巻。十二巻。MOA美術館所蔵。以下、堀江と略記）の、二種の岩佐又兵衛風絵巻の詞書により、古浄瑠璃の詞章を知り得る。三河国吉田城主・水野忠清の家臣であつた大野治右衛門定寛の、寛永十八年（一六四一）八月二十一日の日記に「五ツ時分二御城へ出御供仕御馳走二上るりかたり伊勢より参いのちこいほり江二なかれ有り」と記されていることから、十七世紀前半には浄瑠璃として上演されていたことがわかる。

二、「堀江物語」の概要

「堀江物語」は、宇都宮系塩谷氏をめぐる物語である。梗概を記す。下野の塩谷郡三千八百町の主である、堀江左衛門頼方は、八幡太郎義家の孫というめでたい人であった。子息の堀江三郎頼純は十六歳になり、上野の原の左衛門たかよしの十三歳の娘と結婚し、やがて若君をもつける。

しかし、父の左衛門頼方が病になり死去すると、堀江家は所領を召し上げられ没落していく。国司として都より下ってきた、中納言ゆきとしは、堀江三郎頼純の妻で、原の左衛門たかよしの娘が美人である。と耳にすると、原を接待し、妻にしたいと申し出る。原は息子の次郎の反対を押し切り、堀江三郎頼純を騙し、三月の大番に上京するよう依頼する。

十月五日に、堀江三郎頼純は七十騎を率いて出立する。が、上田山で原の太郎・次郎らの一軍に待ち伏せされ、戦い、原兄弟を討つが自害する。

原の館に居る姫の夢枕に堀江三郎頼純があらわれたので、姫は堀江の家へ戻ろうとするが、原は姫を国司の館へ引き入れてしまう。

その国司の館に堀江三郎頼純の首が運びこまれてくる。それを見て姫は自害し、死骸は原の館に運ばれ、母の御台も自害する。

堀江三郎頼純の忘れ形見の月若も国司により殺されかけるが、助かり、奥州の磐瀬権守の養子となる。月若は磐瀬太郎いへ村と名乗るが、十五歳の秋、見知らぬ修行者から身の上を知らされる。敵討に向い、国司の城を滅ぼし、国司を討つ。

磐瀬太郎いへ村（月若）は坂東八カ国の国司に任ぜられる。下野に行き、原の左衛門たかよしの白髪を剃り落とす。その後、月若は奥州に下った後、下野に戻り館を建て、堀江家を再興し、富貴の家として栄えた。

三、「堀江物語」の本文の特徴

右に見た如く、作品内容は室町物語と古浄瑠璃で大きな違いはない。が、本文には明らかな相違が見られる。古浄瑠璃本文に、「初もその後」や「申すばかりはなかりけり」などの、古浄瑠璃によく見られる、語り物としての文体的特徴が見出せるだけではない。「堀江物語」の古浄瑠璃本文には、物語本文にはない和歌の記載がある。次の三箇所である。

まず、原の謀略を知らず、堀江三郎が三月の大番に上京するよう依頼を受け、十月五日に、七十騎を率いて出立する際に、姫君と堀江が交わす歌である。

帰り来ん道をば急げ今こそは行くを留むる習ひなければ
とあそばし給へば、三郎殿はきこしめし、やがて返歌にかくばかり
帰り来ん日数を数へ待てよ君三月過ぐるは夢の中なり

次も堀江三郎と姫君が交わす歌である。原の謀略によって自害した堀江が姫の夢の中に現れ、姫に生きて自らの菩提を弔って欲しいと願う。姫は堀江がいなくては生きていけないと応じる場面である。

連れて行習なりせば死出の山闇路を迷ふ事はあらしな
と、かやうに詠じ給へば、姫君夢の中の御返歌に、

連れて行習なくとも死出の山暗き闇路を共に迷はん

最後は、堀江三郎の忘れ形見の月若が、親の敵を討とうと、まず堀
江家の館を訪れ、荒れはてた館を見て一首を詠む。

古の月は変はらぬ跡なるを一人残りて見るぞ悲しき

以上、古浄瑠璃では三場面に和歌が見られる。三箇所とも、物語の
展開上重要な場面に和歌が用いられていることがわかる。すなわち、
堀江夫婦の別離、堀江の死、そして堀江の一子・月若の仇討への決意
の三箇所¹⁾に和歌が配されているのである。三箇所²⁾の和歌は全て関連し
ており、和歌を辿るだけで物語の展開が理解できる。

四、堀江の忘れ形見・月若の歌

右三箇所に記された和歌のうち、最後の月若の歌が最も重要である。
物語の最大のクライマックスである仇討へつながる場面で詠まれてい
るからである。「堀江物語」の最大のクライマックスが、月若らによる
仇討にあることは明らかである。その月若の仇討への決意を表現する
にあたり、古浄瑠璃は、室町物語とは異なり和歌を用いた。
室町物語では地の文で次の如く記されている。

いにしへさぞありつらんと思ふやり、御涙せきあへず（写本）
いにしへさこそありつらんと思ひやり、涙ぐみ立ち給ふ（版本）

右箇所を、古浄瑠璃は一首の和歌で表現した。月若は、荒れ果てた生
家を目の当たりにして、親の敵、家の敵を討つ決意を固める。月若の、
親や先祖への思慕の念と敵討の決意を一首に凝縮させたのである。和
歌の前後の詞書本文を、用字を含め、原本（堀江）に近い形で記せ
ば次の如くである。

ついちもやかたもこほれあち

物あはれなを御らんして一しゆの

うたにかく八かり

いにしへの月八かはらぬあとなるを

ひとりのこりて見るそかなしき

とあそはしたまひてなみたに

むせひたまひしか

堀江（香雪美術館本中巻に相当）、堀江（第十巻に相当）とも
に同文で、和歌は、他の行より下げて二行書きで記されている。

五、月若の歌の典拠——「伊勢物語」の影響——

右の月若の歌で想起されるのは、「伊勢物語」第四段「西の対」で
ある。

うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてとよみて、夜のほのぼのと明るるに、泣く泣くかへりけり。

男が、住む人もなく、調度品が取り払われた屋敷を見て、そのがらんとした板敷に臥せって一首の歌を詠む場面である。「伊勢物語」第四段は男女の恋物語であり、内容は「堀江物語」と異なるが、歌の詠み手が、住人を失い空き家同然となった屋敷を目の当たりとして、茫然自失となっている点で両者は共通している。

「伊勢物語」の「月やあらぬ」の歌は、誰もいない屋敷の前にして、月は昔の月ではないのだろうが、春は昔の春ではないのだろうが、皆移ろい、行ってしまったようだ。私の身一つはもとのままなのに、あの人もいないといった意である。父母を失い一人残された月若が、崩れかかった生家を前にして詠む、「堀江物語」の「いにしへの」の歌と通ずる。堀江と堀江には、前出の詞書に続いて、様変わりし、没落した生家の前に茫然として佇む月若の姿が絵画化されている（挿図参照）。

「伊勢物語」第四段は比較的多く絵画化されているが、堀江の月若と同様に、男が屋敷の前で佇む図柄は寡少である。今のところ、異本絵巻（三巻。東京国立博物館所蔵）、異本絵巻を粉本とした、俵屋宗達筆「扇面散屏風」（東京国立博物館所蔵）以下、東博本と略記）、益田たき子家本（以下、益田家本と略記）の三例が知られるのみである。³⁾



挿図 『堀江巻雙紙』（堀江）・第10巻（部分。MOA美術館所蔵）

異本絵巻において、「伊勢物語」第四段の男は二つの姿態で表現されている。二つの姿態とは、臥す姿態と、立ちすくむ姿態で、異時同図法で描かれている。⁽⁴⁾ 東博本と益田家本は立ちすくむ姿態のみであるが、益田家本は男が正面を向いており、屋敷に向かって立っている、異本絵巻や東博本とは趣を異にしている。⁽⁵⁾

堀江 と堀江 の月若は、荒れ果てた生家に向かって立っている。

「伊勢物語」第四段を絵画化した、異本絵巻の立ちすくむ男の姿態や、東博本の男と同様の図柄である。異本絵巻に異時同図法で描かれた、臥す男の姿態はMOA美術館所蔵本に影響していることが指摘されている。⁽⁶⁾

また、右の月若の歌を受けて行われる、月若一行による仇討を絵画化した堀江 第十一巻の、国司の館の光景には、広げられたままの書物が描かれている。判読がきわめて難しい文字で書かれているが、冒頭の三行は辛うじて読める。字配りや用字も含め、原本に忠実に記す。

むかしひんかしの五条に

おほきさいの宮お八

しましける

右の記述は「伊勢物語」第四段の冒頭部分である。堀江 の制作者の周辺に「伊勢物語」が存したことが推察される。

六、「堀江物語」における和歌の役割

以上の検討により、「堀江物語」の古浄瑠璃本文に「伊勢物語」の影響が見られることは明らかであろう。「伊勢物語」第四段の男を、「堀江物語」の月若に見立てている。月若の歌をはじめ、三箇所配された和歌が古浄瑠璃本文では物語の展開上重要な役割を果たしている。

物語本文にはない和歌が古浄瑠璃本文には何故見られるのであろうか。堀江 や堀江 の詞書は、「堀江物語」が人形浄瑠璃芝居として上演される以前、すなわち語り物時代の本文であると考えられている。⁽⁷⁾ 筆者は、堀江 ・堀江 と同じ、岩佐又兵衛ないしはその工房により制作されたと推定されている岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻について検討し、その詞書に、意図的な改変と思われる箇所が見られる事例を指摘した。⁽⁸⁾ すなわち、「浄瑠璃物語」の一伝本である「上瑠璃」(絵巻、全十二巻、重要文化財、MOA美術館所蔵)の詞書の底本に何らかの理由で改変が加えられていることを考察したのである。

堀江 ・ の詞書に見られる和歌が『上瑠璃』の場合と同様の改変であるか否かは今後の課題である。が、本稿で指摘した如く、堀江 の画中に、「伊勢物語」が冊子として描かれ、その描かれた冊子に記された文句が詞書に記された月若の和歌と密接な関係を有していることは注目してよいであろう。「上瑠璃」の画中には、「浄瑠璃物語」の他の伝本には見られない歌謡が書かれていた。⁽⁹⁾ その歌謡の書き入れが、『上瑠璃』における、絵巻化による改変の跡を示していたのであった。

結び

本稿では、「堀江物語」について、物語本文ではなく、堀江と堀江の二種の岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻の詞書にのみ記載がある和歌に注目し、その和歌の典拠と役割について考察した。

すなわち、堀江・の詞書本文には、「伊勢物語」と関係を持つ和歌が書かれており、物語の展開上重要な役割を果たしていることを指摘した。「伊勢物語」との関係は絵画表現にも見られ、堀江の画中には、和歌の典拠と考えられる「伊勢物語」第四段の冒頭部分が記されていたのであった。

物語本文にはない和歌が、何故、岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻である堀江・の詞書に見られるのか。それは語り物芸能としての性格に起因するのか、または絵巻化による改変なのかは今後の大きな課題である。が、堀江に絵画化された月若の姿や、画中の書き入れから、堀江の制作者の周辺に「伊勢物語」の本文だけではなく、絵画化にあたって用いられた伊勢物語絵の粉本が存した可能性は極めて高いと思われる。その粉本が、比較的多く残存する伊勢物語絵のうち、異本絵巻と東博本の二点にのみ見られる、稀な図柄であることは注目してよいであろう。堀江という岩佐又兵衛風絵巻の制作過程、ひいては「堀江物語」の性格を知る上で、重要な手がかりとなると考えるからである。

注

- (1) 拙稿「岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群の芸能資料としての価値」(『岩佐又兵衛全集 研究篇』藝華書院、二〇一三年)、同「古浄瑠璃絵巻『堀江』について 京都国立博物館所蔵本の伝来を中心に」(『近世文芸 研究と評論』八五号、二〇一三年一月)。
- (2) 阪口弘之校注「ほり江巻双紙」では「昔なれし友はさながら夢のよをひとり残りて見るかたぞなき」(拾玉集・慈円)と注する(新日本古典文学大系九〇「古浄瑠璃 説経集」岩波書店、一九九九年、一四八頁、注三)。
- (3) 『宗達伊勢物語図色紙』(羽衣国際大学日本文化研究所・伊勢物語絵研究会編、思文閣出版、二〇一三年、二〇・二二頁)。
- (4) 『伊勢物語絵巻絵本大成 資料篇』(羽衣国際大学日本文化研究所編、角川学芸出版、二〇〇七年、五六頁) 絵4参照。
- (5) 注(3) 参照。
- (6) 注(3) 前掲書一八頁。
- (7) 注(2) 前掲書一〇九頁。
- (8) 拙著『岩佐又兵衛風絵巻群と古浄瑠璃』(ベリかん社、二〇一一年、一四三頁) 参照。
- (9) 注(8) 前掲書一六九頁。

本稿は、二〇一三年二月四日に行われた、中京大学文化科学研究所「詩と散文」研究グループにおける研究例会での口頭発表をもとにしている。席上、ご意見を賜った、小高道子教授、明木茂夫教授、柳沢昌紀教授に心から御礼を申し上げます。また、図版掲載については、MOA美術館に多大なご配慮を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

(ふかや だい / 中京大学文化科学研究所準所員・
中京大学国際教養学部非常勤講師)